

The Story of
邪悪にして悪辣なる
地下帝国物語

Evil and Unscrupulous Underground Empire

Hideki Uryu
雨竜秀樹

3

モニカ

勇者をも翻弄する力を持つ謎の凄腕女盗賊。
迷宮の秘密を仄めかすが……!?



アルメ

勇者カイルを慕う聖王国の元聖堂騎士。
地下迷宮攻略の使命を与えられている。



ハルヴァー・アベル・
アルティムア

アルアークの妹。絶大な魔力を持つ、
地下迷宮の支配者の一人。
兄を狂信的に崇拝している。



アルアーク・アベル・
アルティムア

滅亡した魔法帝国の皇子。
妹とともに、地下迷宮の化身となり、
侵略国への復讐を企む。



地下帝国の重鎮達

セレンディアス・ルフエストニアム

聖神教会に反抗する黒い勇者、
通称：セレス。
女盗賊モニカの挑戦を受け
聖都で死闘を演じる。



カイル・ランフレア

聖王国に属する七勇者の
一人だったが、
地下帝国の主との戦いに敗れ、
その臣下に加わる。



テルキス



テオドール・ピロスト



グラッド



シア



ルガル



プロローグ

「月が真っ赤に染まっていた。

「絢爛たる聖都は静けさに包まれており、夜遅くまで行われる司祭達の説法も騎士達が剣や弓を扱う訓練の音も、この夜はまったく鳴りを潜めていた。

聖都の民衆は、そのただならぬ雰囲気に誰もが言い知れぬ不安を覚えた。

赤い月は人々の不安を象徴しているかのようにある。

熱心な聖神教の信徒である聖都の民は心を落ち着かせようと、聖神に祈りを捧げたが、一度生まれた不安を消すことはできなかった。形のない恐れが夜の闇を深め、聖都全体を包み込んでいく。

そんな中、ある古びた館の前に、とある少女が現れた。

モニカである。

「ぴよんと飛び撥ねた髪の毛を揺らしながら、モニカは目当ての人物を見つけて声をかけた。

「セレンデアス・ルフエストニアムさん、探しましたよお〜」

名を呼ばれた女は、館に入ろうとしていた足を止め、少し驚いたように答える。

「へえ、よく噛まずに名前を言えたな」

「驚くポイントはそこスかあ？ 『よくこの場所を突き止めたな』とか、『お前はいつたい何者だ』とか、そんな感じのリアクションを期待していたんスけど？」

にやははと、モニカは猫のように笑う。

敵対する意思はないとも取れるし、相手を油断させる演技にも見える。

女は少し困ったような笑みを浮かべて言った。

「とりあえず、オレ様……おっと、わたくし様のことはセレスって呼んでくれ、本名はセレンディにや……、セレンデアス・ルフエズ……。ああ、長い名前なんでな、舌を噛みそうなんだ」

目立つ容貌の女である。

シヨッキングピンクに染めた長髪、ギラギラと輝く紫と金の色違いの瞳。

美しくはあるが、その美しさは獲物を油断させる人食い花が持つ類のものであり、その鋭い眼光は獲物を狩ろうとする野獣のようでもある。

「セレス、七勇者の一人にして、聖神教会に反抗している異端児」

「ご存知いただき、光栄の至りだ」

「聖神教会から指名手配されている貴女が、その聖神教会の総本山ともいえる聖都のど真ん中に堂々と館を構えているのには驚きましたよ。この聖都の警備も意外とザルなんスねエ」

モニカはからかうように言う。

この聖都、大軍を防ぐ備えは万全だが個人の抜け道は多い。それもこれも、金で動く輩がいるためだ。

「それで、何か用事か？」

「いやあ、七勇者の一人である貴女にお願いがあつて来たんスけど……」

七勇者。

聖王国にいる七人の勇者はいずれも一騎当千、いや、一騎一軍に匹敵する力の持ち主である。

彼らのうち、三人は聖王国の軍に属しており、三人は冒険者として活動している。

そして、残る最後の一人はセレス。

勇者でありながら聖神教会に反抗する者である。

「話くらいは聞いてやるよ。入りな」

何かの魔法か、ギイイイと軋んだ音を立てて、門が独りでに開く。

彼女の住処らしいが、パツと見はまるで幽霊屋敷のようだ。

手入れがされていないため、草木は茫々、門の蝶番も錆びている。おまけに泥棒が侵入した形跡があり、何カ所も窓が割られていた。

外観だけでこのありさまなので、館の中は、推して知るべしである。

「外でいいスよ」

別に、掃除していない埃だらけの部屋に入ることを嫌がったわけではない。

単純に、外の方が話しやすいと考えたからである。

(しばらくの間なら、教皇の目を誤魔化すこともできますしねエ)

モニカは笑顔を崩さずに続ける。

「地下迷宮に手を貸すの止めてもらえませんか？」

「地下迷宮？ さて、どつちの地下迷宮だ？」

セレスは面白そうに尋ね返す。その目は相手を見定めつつ、飛び掛かる隙を窺っている獣のようだ。

「どつちもです」

モニカはきつぱりと答える。

「地下迷宮は世界にとつて、害悪スよね？ 勇者としては、どつちもぶつ潰すのが正しいと思いませんか？」

「勇者としての本分を忘れたオレ様……、おっと、わたくし様には関係ない話だな」

セレスは肩をすくめる。

「ケチッ」

モニカはぶつと頬を膨らませる。

「ははっ、交渉する相手を間違えたな！」

そう叫ぶや否や、セレスはいきなりモニカに飛び掛かった。

いつの間にか、禍々しい輝きを宿す剣を手にしており、その剣がモニカ目掛けて振り下ろされる。しかし、それを予想していたのか、モニカは後方に跳んで回避した。

「オレ様……おっと、わたくし様がぶつ壊すつもりなのは、聖王国の方だけだぜ！」

その言葉を聞いて、モニカは軽く肩をすくめながら、飛び撥ねた前髪を揺らす。

「そうですね。カイルさんみたいにチョロくないみたいですし……、貴女がどちらの味方をするかは知っています」

と、あくまで余裕を崩さないモニカに、セレスは警戒を強めた。

何度も死線をくぐり抜けた勇者に備わる勘が、「筋縄ではいかない相手だと警告している。

「知っている？ おいおい、初対面のはずだが？」

セレスの質問を、モニカはきれいさっぱり黙殺した。

「仕方がありませんね。扱いにくい役者には、御退場いただきます」

モニカも手品師のように短剣を次々と取り出すと、手にした物から順に投げつけた。その動きは適当なように見えて、短剣一本一本がセレスに吸い込まれるように飛んでいく。

様々な方向から迫り来る短剣を、セレスは己の剣を振り回して叩き落とし、そのままモニカとの距離を詰めていった。

それに対して、モニカも逃げることなく間合いを詰めると、再び短剣を手品のように取り出し、セレスの喉元を目掛けて一突きする。

普通の人間ならば、そのまま喉を貫かれて即死するような素早く的確な一撃である——が、セレスは即座に迎撃した。

セレスの長剣とモニカの短剣が激しく火花を散らす。モニカの短剣が弾き飛ばされるかと思われたが、彼女は勇者セレスの一撃を見事受け止めた。

だが、勇者の顔にあるのは驚きではなく歓喜だった。

(強い！)

自分と互角、いや、それ以上に戦える相手は久しぶりである。

セレスは嬉しくてたまらなかった。

だからつい、相手が人間であることを忘れてしまった。

つば競り合いを続けたまま、セレスは呪を紡ぐ。

「——攻撃、無慈悲なる必滅」

これは勇者のみが扱える攻撃魔法であり、周囲に無数の光球を生み出して敵に叩き付ける大技である。基本的に魔獣や巨人などを仕留めるために使う技であり、人間相手に使えば、骨も残さずに消し去るほどの威力を有している。

次々と光球が生み出される中、モニカは素早く対抗呪文を唱える。

「——福音、偉大なる守護神は此処に」

モニカの背後に、盾を手にする顔の無い騎士の幻影が浮かび上がる。

同時に、セレスの周囲を漂っていた光球が一斉に掃射された。

先ほどモニカが投擲した短剣をセレスがごとごとく撃ち落としたように、今度は騎士の幻影がすべての光球を弾き返す。

「見たこともね魔法だな……、いや、それとも奇跡か？」

騎士の幻影は役目は果たしたとばかりに、姿を消してしまう。

「にやはは、なんでしようかねエ？」

双方、不敵な笑みを浮かべ、一步も引かぬ態勢で競り合い続ける。

力を抜いた瞬間、命を失うことになるという緊迫した状況にもかかわらず、二人は愉しそうに笑っている。

「勇者は地上では殺されないって聞きましたけど、セレスさん、はじめての犠牲者になりますか？」

「いや、それよりも、いろいろ謎を持ったお前が謎のまま死んでいくのはどうだあ？」

二人は同時に後方へ跳び退き、武器を構え直した。

「ところで、いくら深夜だからって、こんなに暴れまわれば聖都警備隊が出張ってくるはずだが？」

剣を打ち合う程度ならばいざ知らず、深夜に大魔法が炸裂すれば、住民達は騒ぎ、聖都の守護を任された者達が駆けつけて来るはずだ。しかし、その気配は全くない。

皆、深い眠りについていているかのような静けさである。

「邪魔になりそうだったんで、ちょっと細工をしておいたさ。どんなに騒いでも、誰もここには来

ませんよ」

「まるで、強姦魔みたいな台詞だな」

「にゃ!?」

セレスの言葉に、モニカは心外だと目を丸くするが、すぐさま自分の言った台詞を思い出して、照れたように笑う。

「ん〜、言われてみれば確かに……、では、言い直しましょう。この夜は私達だけのもの、寝かせませんよ〜」

「……今度は、売れない男娼の客引きみたいだな」

セレスはぼやきながら、問いかける。

「ひよっとして、この不気味に輝く赤い月のせいかな？」

「さあ、どうでしょうか？」

「隠すなよ、お前の仕業だろ？ オレ様……おっと、わたくし様の勘がそう言っている」

魔法や奇跡を駆使して天候を操作し、自分に有利な状況を作り出す術者は大陸でも数えるほどしかない。

だが、セレスはこの女ならばそれくらいできるような気もした。

「……勘がいいスね。『恐れよ、狂神の憤怒』、たとえ神の代理人である教皇でも、今何が起こっているかわかりませんよ」

正直に答えた彼女に、セレスは嬉しそうに笑いながら言う。

「そんな準備をしてくるってことは、交渉は決裂すると、最初からわかっていたんだろ？」

「おや、ばれたスか？」

道化のような態度を示すモニカに、セレスは心底感心する。

「ああ、いいなあ〜。いい勝負ができそうだ……」

モニカはペロリと唇を舂めて、問いかけた。

「おい、もう一度名乗れよ。戦の礼儀だ」

ただ蹂躪するつもりであったが、その他大勢ではないようである。

その名を覚えておこうと、セレスは名乗るように促す。

「様式美ってやつスか？」

めんどくさいと思いつつ、彼女は完璧な一礼をして名乗りを上げた。

「私の名はモニカ……、二つ名とかは特にない。とりあえず、より良い世界のために、黒き勇者セレスさんに挑戦させていただくスよ」

勇者もそれに応じる。

「いいだろう。七勇者の一人、セレンデアス・ルフエストニアムが受けて立つ」

セレスはそう言うと、自分の言葉に驚きつつ苦笑した。

「……お、今回は名前を囁まずに言えた」



それを合図に、両者は戦いを再開する。

剣戟が響き渡り、魔法により生み出された炎と雷が大地を引き裂くような轟音を響かせた。さらには、誰も見たことのない魔導の道具や神祕の技が飛び交う。

しかし、セレスが指摘した通り、聖都には誰一人、この死闘の目撃者はいなかった。人知れず始まった戦いは、人知れず終わることになる。

次の日、セレスとモニカが戦った場所に無数のクレーターができていることに住民達が気付き、大騒ぎとなる。

聖都警備隊は調査を行ったが、原因を突き止めることはできなかった。

ただ、そこで激しい戦いが起きたことは明白であり、その凄まじい痕跡の原因についての噂が聖都に流れたが、数日もするとその噂は消えてしまった。

セレスとモニカという二人が戦ったことは誰も知ることがなかったのである。

しかし、この戦いの結果は、聖都から遠い地にある「邪悪にして悪辣なる地下迷宮」の将来を大きく変えることになるのであった。

何故なら、地下帝国に味方するはずであったセレスは、この戦いを機に別の道を歩むことになるからである。

第一章 地下帝国の日々

邪悪にして悪辣なる地下迷宮の最深部、第八階層。

そこは、地下迷宮の支配者アルアークのために作られた後宮^{しうきゆう}であり、「悦楽の神殿^{えつらく}」と呼ばれている。ここに立ち入ることができるのは、地下迷宮の支配者である兄妹と彼らの寵愛^{ちゆうあい}を受けることを許された女のみである。

今まで、兄妹以外にこの場所を訪れたのは小国の姫フランディアルだけであつたが、本日新たに十二人の娘が迎え入れられた。

暗殺者集団「黒蠅^{くろがむ}」の中から選^{えら}び抜かれた娘達だ。

狼のような琥珀色^{こはく}の瞳。

死体を燃やした後に残る灰のような色の髪。

蜜を塗ったようにヌラヌラとした暗褐色^{あんかっしよく}の肌。

それ以外は特に共通点はない。

妖艶な長身の美女もいれば、幼い少年のような背の低い少女もいる。

髪型もバリエーション豊かで、アルアークの妹・ハルヴァーのように長く伸ばした者もいれば、

短い巻き毛の者もいる。

愛らしい者、凛々^{りんり}しい者、儂^{はか}げな者など、おそらく可能な限り見た目の違う娘を集めたのだろう。

これほど美しい娘達が集まれば、男色家でもない限り、必ず一人は好みのタイプがいるはずである。

「美しいな」

「うん、合格！ 黒い宝石のようだね。兄様^{にいさま}の傍^{そば}に置くに相応しい」

と、絶世^{ぜっせい}の美貌^{びぼう}を誇る両君主からも称賛の声が上がる。

彼らが見ていたのは見た目の美しさだけではない。

娘達の立ち姿や瞳の輝き、その精神と魂の色まで感じ取って出した評価である。

「一族の繁栄のため、どうかお傍に仕えさせてください」

一人の娘が一同を代表して口を開いた。

彼女は「黒蠅^{くろがむ}」の長ルガルの娘である。

扇情的な服を着ており、十二人の中でひととき目立っていた。

「よかろう。私の名において、「黒蠅^{くろがむ}」の一族と血の契^{ちぎ}りを結ぼう」

そう言つて、アルアークは魔法で短剣を呼び出すと、軽く手の平を傷つける。

その血が床に落ちぬように、ハルヴァーは銀の杯を出現させ、兄の傍に寄り添い、手から流れる血を受け止めた。

杯が血で満たされると、ハルヴァーは兄の傷ついた手を癒^いすように舌を出してぺるぺると舐める。

「ああ、にいさまのちい……」

潤んだ瞳で傷を舐め続ける妹から銀杯を受け取り、アルアークは傷ついていない方の手で銀杯を掲げた。

「魔法帝国の法と同じく、王族である私は誰か一人を伴侶とすることははない」

裏を返せば、たとえ誰か一人を愛することになったとしても、その一人だけに愛を注ぐことは許されない。

魔法帝国では正室という概念は存在しない。

女騎士の嫉妬による争いを避けるための措置であると同時に、皇帝の愛が平等であることを示すためのものでもある。実際に上手くいくかどうかは魔法帝国の長い歴史を見ても半々だが、アルアークの父と祖父はそのあたり非常に如才なくやっていった。祖父の千を超える妃は全員不平不満など言わなかったそうだ。父も十数人の妻に平等の愛を注いで諍いを起こさせなかった。

しかし、これだけ多くの伴侶がいながら、魔法帝国の王侯貴族は子宝に恵まれる機会は少ない。そのため、世継の問題に悩まされることはしばしばあるが、王位継承権を争うような事態は数えるほどしかなかった。

「祖先の名に懸けて、みな平等に愛そう。他に愛する男がいるのならば去って良い。咎めはしない。この婚礼に異議がある者も同様だ」

男女の愛と呼ぶには程遠い言葉だが、王族の彼は普通の恋愛などしない。しかし、だからといっ

て、愛がないわけでもない。彼は確かに伴侶達を幸せにするであろう。

そして、彼の言葉に、「いいえ、異議などありません」とルガルの娘が答えた。

他の娘達も同意して一礼する。

「では、誓約の血を飲むがよい」

アルアークが冷たい声で命じた。

最初の一人が銀の杯に近づき、中に入った血を啜る。それを皮切りに、娘達は順に銀の杯に口をつけていく。杯の中の血の味は酒にも似た酩酊感を伴うものの、アルコールを喉に流し込んだ時のように体がカッと燃える熱さはない。氷のような冷たさなのだ。

最後の一人が銀の杯の血を飲み干すと、地下迷宮の支配者アルアークは蒼い瞳に冷たい輝きを宿しながら宣言した。

「血の誓約はなされた。黒蠅”の一族に邪悪なる祝福を……」

ハルヴァーも唇についた血をペロリと舐め取って、妖艶な声音で宣言する。

「ああ、兄様が……、地下帝国がある限り、そしてキミ達が忠誠を誓い続ける限り、一族の繁栄を保証しよう！」

「父ルガルを筆頭に、我ら黒蠅”の一族、今後も変わらぬ忠誠を誓います」

その誓いを、アルアークは受け取った。

「よかろう。ではこれより、汝らは私の花嫁だ」

そうやって、彼女達に新たな名を与える。

「これより、スカーレット・スラックス「黒蠅の花嫁」として、仕えるがよい」

「新しき名、ありがたく頂戴いたします」

娘達は喜びを噛みしめながら頭を下げた。

血を交まじわらせる婚礼の儀式は終わった。

次は、花嫁としての役割を果たす必要がある。

「ではさっそく、務めを果たしてほしい」

「なんなりと」

黄金の髪を持つ美丈夫びじょうふは重々しく告げ、スカーレット・スラックス「黒蠅の花嫁」は嬉々ききとして主命を待つ。

何をすればいいのかは、妹であるハルヴァーが答えた。

彼女は兄の手の傷口を舐め終え、説明を始める。

「『地下迷宮の書』が奪われ、兄様にいさまの力は大きく落ちてている」

それは、次のような理由からであった。

まず地下迷宮には重要な心臓部ともいえる「迷宮核」ダシジョンコアがある。

次いで重要な五つの秘宝「地下迷宮の書」「魔杯まはい」「災厄の鍵かぎ」「魔法帝国の王錫おうしやく」「挑戦者の証」

が存在する。

それらは、アルアークとハルヴァーの力の源にして、彼らがその身に魔法帝国の魂を撃うぎ止める

ための秘宝なのだ。

同時に、不死身の彼らにとって唯一の弱点でもあった。

言うなれば、「迷宮核」ダシジョンコアは彼らの命そのものであり、五つの秘宝は手足に等しい。そして、地下

迷宮内に溢れる大量の金銀財宝は血である。

したがって、その一つが地下迷宮の外に運び出されると、その時点で、彼らの力は大きく減衰げんさいしてしまうのである。

少し前、地下迷宮に侵入した謎の女盗賊モニカによって、「地下迷宮の書」が奪われた。その後、一緒に行動していた勇者カイルを仲間に取り入れ脳内を探したが、見たこともない術で勇者の記憶は改竄かひざんされており、秘宝の行方はようとして知れなかった。そのため、アルアークとハルヴァーはモニカの存在すら知らずにいる。

しかし、モニカの存在はわからずとも、誰かが「地下迷宮の書」を奪ったことは間違いない。そのため今は、著しく低下したアルアークの体力を回復し地下迷宮の防御を固めなくてはならない。

ところで、この理屈からすれば不思議な話だが、アルアークと一心同体であるはずのハルヴァーの体力は消耗していない。

それは、この兄妹が地下迷宮の創造時に自らの肉体と精神に施した特殊な絡繰からくりによるものである。秘宝が奪われた際に生じるダメージや傷は、すべて兄のアルアークが被かるようになっておいたのである。

「迷宮核」が運び出されたり、あるいは山のような財宝が根こそぎ奪われたりしない限り、ハルヴァーが傷を負うことはない。

なぜ、そのような措置を施したのか？

その一番大きな理由は、地下迷宮で最強を誇るハルヴァーが常に万全の状態で動けるようにしておくためである。

「兄様に『魂』を捧げて……。ああ、勘違いしないでね。死ねって言う訳じゃない。少し疲れるかもしれないけど、大丈夫」

ハルヴァーは邪悪な笑みを浮かべた。

普通の人間ならば恐れ慄くだろうが、スカニゲルム「黒蠅の花嫁」達は至って平然としていた。それどころか「具体的には、どうすればいいのでしょうか？」と自ら率先して問いかける。そこには恐怖も不安もない。

その琥珀色の瞳に映るのは、支配者に対する狂信と忠誠の色だけだ。

もう少し詳しく説明しようとするハルヴァーを、アルアークは手で制する。

そして、冷たい笑みを浮かべると、「来い」と命じ、スカニゲルム「黒蠅の花嫁」の一人を抱き寄せた。

「口で説明するより、この方が速い」

言われるまま体を預ける花嫁の首筋に——アルアークは吸血鬼が血を吸うかのように噛みついた。突然の凶行を受けながらも、花嫁は痛みの声を漏らす代わりに「あああ！」と快感に痺れる声を

上げた。全身が凍るような冷たさに襲われつつも、内側からは灼熱の炎に燃やされるような熱さがあるという、相反する感覚に貫かれる。それは、目から涙が溢れ出るほどの想像を絶する快楽である。

そんな心を溶かす快楽から逃げようとする者などいない。

恍惚の表情を浮かべ、花嫁は自らアルアークの肩に手を回す。

「ここまでだ」

アルアークは娘の首筋から口を離す。

噛み痕からわずかに血が流れているが、それほどひどい傷ではない。

「あと何度か繰り返す。しばらく休め」

スカニゲルム「黒蠅の花嫁」は蕩けるような顔つきのまま、よろよろと後退する。

そして、すぐに代わりの花嫁がアルアークの前に立ち、期待に目を輝かせて首筋を晒し主人の抱擁を待つ。

——魂の蒐集。

吸血鬼が乙女の生血を力とするように、アルアークとハルヴァーは人の魂を力の源としている。

地下迷宮の化身である彼らが魂を手に入れる方法は様々だ。地下迷宮の中ならば、侵入者が魔物に殺された時や致死性の罠で止めを刺された時、あるいは空腹で行き倒れた時などに手に入る。外であれば、眷属に与えた機能で奪い取れる。

そして今回の場合のように、自らの意志で魂を差し出す従僕から受け取る場合もある。

このように地下迷宮の支配者達は魂を蒐集する一方、その魂を消費しながら金銀財宝を生み出し、神にも等しい力を行使しているのだ。

ところが、魂の管理に必要な秘宝の一つを何者かによって奪われてしまったため、地下迷宮の一部の機能に狂いが出ている。急ぎ修復する必要がある。

そこで呼び寄せられたのが、黒蠅の花嫁^{スカニゲルム・ブラス}達である。

アルアークは自分を愛する女達を魂の通行口にする「愛欲の聖餐^{せいさん}」という権能を有している。

これを行使すれば、眷属を派遣する必要なし——地上で失われた魂を集めて取り入れることができる。

現在、シアの他に、聖王国の騎士であったソフィと元勇者のカイルが眷属となっているが、ベテリア帝国を相手にした時と同じように地上に送り出すことはできない。

なぜなら眷属である彼らが敗れてしまえば、アルアークだけでなく、ハルヴァーも秘宝が奪われた時と同様のダメージを受けてしまうからだ。

秘宝を奪った者が何者なのかわからないのに、彼らを外に出すのはリスクが大きすぎる。

そこで、「愛欲の聖餐」の出番となるわけだが、当然アメリカットもあった。

まず、魂の通行口となる女達は極度に疲労する。

普通の娘ならばすぐさまミイラと化してしまうだろう。

その点、黒蠅^{スカニゲルム}の娘達は美しいだけでなく、優秀な暗殺者たるべく厳しい訓練で強靱な肉体を作り上げている。

そのため、アルアークの死の抱擁を受けても即死することはない。もちろん、殺さないように手加減しなければならぬが、アルアークは、そのあたりの力加減は心得ている。

少なくとも、妹よりは。

復讐のためならば、自分を慕う者を死地に向かわせる冷酷さはある。

だが、無意味に同胞を殺めはしない。

娘達を抱擁する兄の姿を見つめながら、ハルヴァーは恭しく頭を下げた。

口元に浮かぶのはいつも通りの邪悪な笑み。

本格的に魂と生気を奪い取る様は、獣が交わるような激しいものである。

「それじゃあ兄様、今しばらくご休息を……、後は私がやっておくね」

「任せた」

考え方は多少異なる兄妹だが、目的は共通している。

すべては復讐のために。

聖王国を支えるすべてを壊す。

そのために、今はまだ力を蓄える。

地下迷宮を生み出すまでに五年もかけたのである。

あと少しくらい時間をかけても問題はない。

* * *

地下第七階層、「王の間」の近くに配された会議室。

そこは気品をたたえた美しい造りで、数十人がゆったりと入れる広々とした空間である。だが、今この会議室にいるのは僅か三名にすぎなかった。

いずれもアルアークによって召喚された異界の騎士達だ。

第一に召喚された騎士は、墮落せし獵犬を従える審判の騎士のテエルキス。

紺碧の鎧兜を身に着けた、威風堂々たる大柄の騎士である。その体軀に相応しい大剣を手にしており、彼が動かした際に、ベルトから提がる首輪付きの鎖がジャラリと音を立てた。

次に、勇者カイルとの戦いで召喚された騎士が二名。

盲目の人形を従える刑罰の騎士、ジャディア。

真紅の鎧兜に鳥を模した黄金の仮面で顔を隠した、少年のように小柄な騎士である。手にした短剣をぐるぐると回しており、イヤリングのように耳に着けた鈴がチイリーンと透明な音色を奏でる。

さらに無尽なる数の蟲を従える飢饉の騎士、ストルニトス。

錆びついた深緑の鎧兜と暗い紫色のマントに身を包んだ巨漢で、三人の中で最も体格が大きい。

丸太のように太く凶悪な棍棒を手にしており、体を動かすたびにギイイイと錆びついた鎧の音を響かせている。

彼らは終末と呼ばれる世界に属する騎士であり、アルアークの召喚魔法により呼び出された存在だった。

一騎当千の力を持つ強者なのだが、異世界より召喚された身であるため、この世界に留まるには絶えず魔力を召喚者により供給され続けなければならない。もしも召喚者との繋がりを断ち切られたら、この世界から放逐されてしまう。

それが彼らの弱点である。

とはいえ、アルアークの召喚魔法を打ち破れる魔法や奇跡の使い手はそう多くはない。

『以上が、陛下からの伝言だ』

新たに呼び出された二人の騎士に、テエルキスは今後の方針を聞き取りにくい濁声で告げた。「なるほど、我が主の望みはわかったよ。ボクらに軍を率いるって言うんだね？」

鳥顔の仮面を着けた真紅の騎士ジャディアが、少年のような外見に見合った軽い口調で言う。彼が派手なオレンジ色のマントを翻すと、チイリーンと鈴のような音が響き渡る。

体を動かすたびに音を出すのは、終末の騎士の種族としての特徴なのだ。

テエルキスもストルニトスも例外ではない。

その他にも、終末の騎士達に共通するものはいくつかあった。

それは騎士としての誇りが歪んでいること、捕虜を束縛すること、などである。

異界の住人でありながら、彼らなりに自らの能力を誇るように演出に気を遣っているらしい。

「シカシ、難シイナ」

巨漢の騎士ストルニトスの声は、聞く者を不快にさせる。

『ああ、しかし、難しい仕事を命じられるというのは、期待されている証拠でもある』

濁声で呟いたのは、テェルキスだ。

他の二騎士もコクリと頷く。

個による武力ではなく、兵を率いて敵を制圧せよ。

テェルキス達ですでに個々の実力を十分に示した、今度は将としての実力を見せる、というのがアルアークの命である。

今現在、地下迷宮の外で万の軍勢を率いることができるのは、プルックだけだった。

「強制進化の祭壇」で新たなゴブリンの王を生み出そうとしても、上手いかなかったのだ。

それは、ゴブリンの個体ごとに経験や資質が異なるためと考えられている。

不死者やゴブリンといった兵の数が増えてきた今、地下迷宮の支配者としては、彼らを統率し運用できる将軍が一人でも多く欲しいところなのだろう。

つまり、アルアークは終末の騎士達をゴブリン達の見本としようというわけだ。

三騎士は、召喚者であるアルアークの邪悪な波動に心酔しているため、その望みに全力で応える

気になっていた。

「デ、率イルノハ？」

ストルニトスが不快な声で尋ねた。

終末の騎士は存在するだけで周囲に恐怖を振り撒く。そのため、臆病なゴブリン達を操るには適任ではない。もちろん、主が命じるのならば無理を押し通す心づもりではある。しかし、アルアークは配下の特性もきちんと把握していた。

『不死者だ』

テェルキスが答えた。

先の戦いで、プルック率いる妖魔軍は大勝し、その際の死体はほとんど回収している。

その後、地下迷宮の支配者に仕える悪魔達が死霊魔術を駆使し、それらの死体に偽りの命を吹き込んだのである。

負なる力により動く腐乱死体、白骨化した骸骨兵などに加えて、黄色い霊質を纏わせた死霊騎士、怨念により巨大化した死せる巨人などが生み出されており、その数は今なお増え続けている。

『不死者の群れを率い、我々はベティア帝国を攻める』

「フム」

「異論はないけど……、ロナン王国はどうするの？」

フェーリアン王国の北に位置する二つの大国。

北東にあるベティア帝国。
北西のロナン王国。

どちらも魔法帝国を滅ぼすのに力を貸した仇敵であり、アルアークとハルヴァーが滅ぼすと誓った国々である。

『そちらには、妖魔達が当たる』

テエルキスの濁声が響く。

「妖魔！ あんな弱い奴らで大丈夫？」

ジャディアはまるで劇場の役者のように、大げさな身振りで言う。

「ステニ戦ッテ、勝利シテイルト聞ク」

鎧を不快に軋ませながら、ストルニトスは呟いた。

『ハルヴァー様がお決めになったことだ、我らは従うのみ』

本来ならば、自分達だけで二国を相手取りたかったのだが、アルアークから全権を託された妹君の命令とあれば従うしかない。

「まあ失敗したら、僕らが代わりにやればいいか」

「ソノ通りダ」

『……』

終末と呼ばれる世界から顕現した彼らだが、この世界に呼ばれて受肉する時、召喚者を通してあ

る程度の知識を与えられている。

だから、ゴブリンやオークと自分達との力量もよく知っていた。

彼らからすれば、人間も妖魔も羽虫程度の強さなのだ。

そのため、どうしても相手を過小評価してしまうが、テエルキスは違う。

アルアークの呪法により、本来の種から格上げされた妖魔達の存在を認めていた。自分達に敵うとは思っていないが、決して低くも見ていない。

『我らの目的はベティア帝国だ。ゆっくりと、押しつぶすように進撃する』

その声には、どこか陶酔するような響きがあった。

地下帝国の主であるアルアークとハルヴァーは、一息に敵国を滅ぼして終わらせる気はない。

それで気が済むのならば、とうの昔に実行している。

彼らは敵国に苦しんでほしいのだ。

魔法帝国を滅ぼした国々に恐怖と混乱を味わわせたいのである。

まずは不死者が恐怖を与え、妖魔が混乱を及ぼし、既存の秩序を瓦解させる。

そしてすべてを復讐の劫火で焼き尽くした後、聖王国が望まぬ新しい秩序を打ち立てる。

『すべては、アルアーク様とハルヴァー様の為に』

テエルキスはそう呟く。

同意するかのように、他の二人も首を縦に振る。

邪悪なる支配者に従う地下帝国の騎士——、彼らは主が望むのならば、弱者も強者も関係なく難^なぎ払うだろう。

それは別に、彼らだけが特別なわけではない。

この地下迷宮において、アルアークとハルヴァーに奉仕することは当たり前なのである。

* * *

「ギース。シア様、何しているんだ？」

小悪魔のギーは翼をバタバタと動かしながら、実験室で薬品の調合をしている少女に問いかけた。翼の生えた不細工な猫のような姿をしているが、彼の正体は至高階級悪魔^{アーク・デーモン}である。シアはこのギーと魂レベルで融合を果たしており、ギーが悪魔として有する数々の権能を自在に操ることが可能だった。

シアと呼ばれた少女は、どんよりとした金色の瞳に深い闇を宿したまま、使い魔に答える。

「新薬の開発」

「薬？ 誰か、病気にでもなったのか？」

「正確には、薬と毒」

シアは口元に笑みを浮かべ、机の上に置かれたジャガイモに液体を垂らす。

すると即座に、ジャガイモに黒いイボのようなものが生じた。

続けて、麦に液体を垂らすと、黒い爪にも似たものが現れる。

「ギー、知っている？ 貴族達の収入、そのほとんどは農民達が納める作物で成り立っている」

国家権力は常に民に税をかける。国を運営するために必要だとされているが、実際は権力者は私腹を肥やしていることが多い。

都市から離れた農村部の民はほとんど金銭を所持していない。よって、麦やジャガイモ、カボチャ、トウモロコシ、キャベツ、ニンジン、トマト、リンゴ、ブドウなどの農産物を税金の代わりにするのだ。

貴族は税として受け取った作物を商人との取引で金銭に交換したり、軍人の糧食^{の糧食とする}とする。当然、量が多ければ多いほど実入りがよいので、貴族達は農民の限界ギリギリまで取り立てる。

「アルアーク様とハルヴァー様は、彼らの不平不満を煽^{あほ}るつもりよ」

シアは別の薬をジャガイモに振りかけた。

すると、黒いイボはかさぶたのようになってポロリと落ちる。

さらに麦にかければ、黒い爪がポキリと折れてしまう。

「シア様、ひよっとして、その薬は……」

小悪魔が答える前に、少女は言った。

「作物を毒物に変える薬よ」

「ギース！」

小悪魔は驚いたように尻尾をピンと伸ばすと、楽しむような声を出す。

そんな使い魔に、シアは「うるさい」と言って、新薬をサツとふりかけた。

「ギァース!!」

毒がかかったと思ったギーは悲鳴を上げ、目を回して床に落ちる。

本来は大悪魔だが、今は小悪魔である。

そのため、毒物への耐性は人間と同じくらい低くなっている。

ところが、ギーの体が変化する兆しはない。

「あ、あれ？」

体を起こして、手を握りしめる小悪魔にシアは淡々と語る。

「聖神……、いや、聖神教会を盲目的に信じていない者には、ただの水よ」

聖神教会の司祭が使う奇跡の中には、「不死者退散」や「悪魔払い」など、不死者や悪魔にしか

効果のない技がある。

シアが今作っている薬は、その奇跡を真似てさらに発展させたものである。

人間、それも限られた者達のみが発動する呪いの薬であり、それと同時に作物の収穫量を何倍にも増やすことができる奇跡の妙薬だった。

「聖神教と生活。人はどちらを取るかと思う？」

「ギース、難しい問題だぜ。聖神教への信仰は、生まれた時から叩き込まれてやがるからなあ。生まれたばかりの雛が、親鳥を盲目的に追いかけているようなものだけ」

小悪魔の説明に、少女は的確な言葉で返す。

「刷り込み」

「そうそう、それだよ！ シア様だって、アルアーく様とハルヴァー様を裏切るくらいだったら、

飢え死にを選ぶだろう？」

「もちろん」

少女は迷わず答えた。

「だったら、無駄なようにも思うんだけどなあ」

小悪魔は嘆息する。

しかし、シアは首を横に振って否定した。

「自ら選択して従っている私達と、従わされている彼らとじゃ……、覚悟が違う」

薬を扱う手を休めず、シアはどんよりとした目を光らせる。

「彼らは絶対におえには勝てない。飢えて死ぬくらいなら、聖神教を捨てる」

断言する少女に対して、小悪魔は首をかしげた。

「そう上手くいくものかね？」

「もちろん、下準備は必要。それと、聖神教を捨てた後の受け皿も必要」

「受け皿？」

「別の信仰」

「聖神教に代わる心の支えを与えてやるのである。」

シアのように、アルアークとハルヴァーを新たな神として崇拜すうはいさせればよい。

信仰に破れた者は、新たな信仰を得ることで精神を保とうとするものだ。これはすでに、バケツ兜の騎士ソフィで実験済みである。

ソフィの聖王国への忠誠を根こそぎ奪ったら、アルアークとハルヴァーを崇拜するようになった。シアはこれと同じようなことを地上で実行しようと企んでいる。地下帝国の洗脳設備は使えないが、その代わりに墮落した聖神教の司祭デリトと墮おちた勇者カイルがいる。彼らの助力を得れば、意志の弱い農民達を仲間に引き入れるのは不可能ではない。

「妖魔だけではなく、人間も取り込む。アルアーク様とハルヴァー様の祖国を滅ぼした国々の民を奪い取る」

「なるほど……、けど、そいつらをどうするんだ？」

「当然、戦わせる」

アルアークと同じように、シアは冷たい声で言った。

「血の代価を払ってこそ、地下帝国の民として認められる。死んだとしても、その魂はアルアーク様とハルヴァー様への供物くもつとなる」

楽しそうに語る少女の言葉に、小悪魔はゾクリと背筋を震わせる。

小悪魔が感じたのは、恐怖ではなく歓喜である。

敵対者を人とは思わない言葉。

闘争を楽しむような瞳の輝き。

一片の曇りもない真っ黒な忠誠心。

悪魔を魅了してやまない邪悪な輝きに、ギーは喜びを抑えながら、少女に問う。

「けど、農民どもは戦えないんじゃないか？」

「戦えるわ。私達が戦うための武器をあげるから」

——魔法帝国の遺産。

普通の武器の扱いが苦手であった魔法使い達は、その欠点を補うために特別な魔法の武器を生み出した。ひとりでに戦う剣や槍、自動で身を守る盾、思うだけで好きなように動く全身鎧などである。魔法帝国が存在した時は付与エンチャント魔法師や錬金術師が少しばかり保持していた魔法の道具であったが、今現在、地下工房で量産を開始している。

「そんなもの渡して、こっちに刃を向けてきたらどうするんだ？」

小悪魔の懸念に、シアはくすりと笑う。

「安全装置くらいつけている」

生み出された武器すべてには、ある種の呪いが仕込まれている。

もしも地下帝国に刃を向けるなら、彼らは自分で自分の首を絞めることになるだろう。

「すべては、アルアーク様とハルヴァー様のお考えよ。あの方々は王族だけど、農民達の残酷さも良く知っている」

農民は弱者だが、決して心優しい存在ではない。

弱いからこそ、むしろ自分より弱い者には残酷になるのだ。

「優しさは、強くなることでしか手に入れることはできない」

シアはそう断言する。

何故なら、弱かった両親は自分を捨て、山賊はシアに暴行をはたらくことで自分の弱さを隠していた。シアはそう考えている。

そして、誰よりも強いアルアークとハルヴァーの、夜の闇のように深い優しさに触れた瞬間、「強さこそ優しさの源泉である」と悟ったのである。

「ギース、ならシア様も優しいってことだな！ 優しい御主人様は献身的な使い魔である俺に、

お菓子の一つもくれて良いと思っぜ！」

「優しいけど、甘くはない」

シアは使い魔を窘める。

「アルアーク様とハルヴァー様、喜んでくれるかな？」

菓を調合しながら、少女は呟いた。

シアの望みは純粹である。

恩人である地下迷宮の支配者達の役に立ちたい。そのためなら、残酷なことに手を染めるのもいとわない。その思いは一般的な倫理観からはかけはなれたものだ。傷を癒す時に使われた秘術が闇に近いものだったからか、あるいは今まで人から与えられた悪意がシアの心を穢してしまったのかもしれない。

ただ、一つ言えるのは、今のシアにとつての幸せとは主人の役に立つということなのである。

「ギース！ そういえば、シア様の『優しさ』で助けた奴隷どもは？」

使い魔のギーは、思い出したように問いかけた。

ベテリア帝国との戦いにて、シアはギーとの融合によって得た権能を使い、多くの少女を助けている。命を助けただけでなく、地下迷宮の支配者達に頼み、悪魔の力を与えていた。自分と同じような地獄を見た少女達に、同情したのかもしれない。

「あの少女達はもう奴隷じゃない。今は私と同じ、地下帝国の兵士」

どんよりとした瞳を輝かせながら、シアは嬉しそうに語る。

「アルアーク様とハルヴァー様は、私達を中心とした悪魔軍の設立を考えていらつしやる。……ブルックさんが率いる妖魔軍に加えて、テルキスさん達が率いる不死軍が誕生しているから、そこに新たに悪魔軍が創設されたなら……、地下帝国には三つ目の軍団が誕生することになる」

「ギース！ だけど、少し前まで戦いも知らない奴隷だったんだぜ？ オレ様みたいな超上級の

立ち読みサンプル
はここまで

悪魔が憑ついているならともかく、中級クラスの悪魔と一体化した程度じゃ、戦力になるかは怪しいぜ！」

ギーの懸念はもつともだ。

悪魔は単体で小隊に匹敵する実力を持っているが、それを操るのはいずれも年若い少女達なのである。

だから、ギーは、彼女達を戦力と考えていいのかと問いかけている。

しかしシアは、机の上に置かれた水晶玉を眺めつつ、こう言った。

「ギー、これを見て」

シアは水晶玉に秘められた魔力を解放する。

映し出されたのは、悪魔の力を宿した少女達と、地下迷宮を訪れた冒険者達が戦っている映像である。

戦いを見つめるシアの瞳の色は、どんな光も届かない川底の汚泥おでいに埋もれた黄金のようである。

それは、闇の中で輝く光。

邪悪な者達が崇拜する、邪悪な希望の光であった。

主人の視線の先にある光景に興味を惹ひかれて、ギーも水晶玉を覗き込んだ。

* * *

地下迷宮の第二階層——地下迷路とも言われる複雑に入り組んだ通路の一角。
ロナン王国に属する冒険者チーム「真実の探求団」は、そこでミノタウロスに遭遇そっぶつした。

ミノタウロスは、人間の体に雄牛の頭を持つ妖魔である、背が高く筋骨隆々きんこつりゅうりゅうとした全身は茶色の毛皮に覆われている。

斧を好んで使う生粹きんすいの戦闘種族であり、縄張り意識が強い。

一対一では並の人間が勝てる相手ではないが、集団で当たれば倒せない敵ではない。

冒険者チームは、敵に気付かれる前に先制攻撃を仕掛けた。

まずは、魔法使いが呪文を唱える。

「——攻撃アタック、炎の波ジュフレイ」

床と壁を舐めつくす火焰かえんが現れ、巨大な妖魔に纏わりついた。

突然の奇襲に混乱するミノタウロスに、冒険者達は一斉に襲い掛かる。

「化け物め、死ね！」

「聖神の為に！」

「この卑ひしい生き物が！」

冒険者チームの戦士達は口々に罵ののり、ミノタウロスに剣を振るう。

ミノタウロスは斧を振り回して反撃するが、多勢に無勢。